

平山輝男氏

「全国アクセント辞典」

藤原与一

この辞典について感銘したことを、いくらかつづつてみたい。

第一に、労作だと思った。ほんとに、労作の名がびつたりとする著述であると思う。「辞典」とはあるが、「本辞典の構成」は、

主部分が、「I、発音・アクセントの概説」から、「X、動詞・形容詞・形容動詞アクセント分類語彙表」にわたるものとなっている。字引きふらの箇所は、この組織の中、

「I、全国アクセント比較表」の(2)として処理されているのである。このような構想での本書は、じつに、アクセントについて、要をつくした書物となっている。読者は、アクセントについての、どのような事項・問題を、本書の中から引き出すことができよう。ここ

までに内容をどとのえた著作は、まったく労作と言わなくてはならない。とりあえず、さいごの「分類語彙表」ひとつを見てもよい。本辞典の労作ぶりは、そこですぐにわかる。

第二に、本書は用意周到である。——ここでは、本書編述の実際面に見られる用意の周到をたたえたい。よく、このように細部にまで、編修心がいきとどいたものだと思う。

編者は、ねばりづよさをもって、あくまでいいねいに、細密に、しごとをしぬいていられる。「文や句など」にアクセントをつけて出されたのは出色であり、そのさいの、文、句のとりたてかたは、じつに用意ぶかくおこなわれている。この配慮の中へは、おのずから

引き入れられていくのである。また、卑近なことながら、表紙をあければ、「おもな記号の約束」が見られる。この掲示にも、なみなみでない苦心が払われている。本書全編の随所に、よくふりをうかがうことができる。

第三に、本書で、平山さん中心の研究組織のよさが思われる。長い年月をかけて、これほどの大業を進められるのには、さだめし、いろいろのほねおりごともあつたらう。平山さんは、たくましい意欲で、一つ一つの困難をのりこえられたにちがいない。そして、協力者のみなさんを、引き上げ引き上げしていかれたであろう。まさに、一糸乱れずというところで、しごとをしてこられたことが察せられる。研究の、実質的な協同動作ということとは、このしごとにならずさわられた多くのかたがたが、こころよく体験されたのではないか。

アクセントそのものこと(たとえば、一代表地としてとられた「広島」のアクセントのことなど)には、今はふれない。一方言のアクセントを調査するとして、どのような相手をどのようにえらぶかというよりな話題にも、今はたち入らない。ここでは、特に、鹿児島アクセントの豊富な資料が提示されたことを、深く感謝したい。(35・9・14)